

後期教養教育（大学院レベル）立ち上げ趣意書

世界最高水準の教育研究をめざす東京大学は、「多様性と卓越性の相互連関」を基本理念として掲げている。教育研究の卓越性の実現のためには、個々の分野がばらばらに併存しているだけではなく、他者に向けて開かれた異分野間の対話と連携が必要であり、単一の尺度で測ることのできない価値をもつもの同士が、互いの差異と固有性を尊重しながらぶつかりあうことが不可欠である。このような多様性を活力として卓越性が実現され、両者が絶えず連動しながら学術を進化させていくために、分野横断・融合プログラムを目指し、大学院レベルの後期教養教育（高度リベラルアーツ教育）を構想する。

リベラルアーツとは、人間が独立した自由な人格であるために身につけるべき学芸のことを指す。現代の人間は自由であると思われているが、実はさまざまな制約を受けている。日本語しか知らなければ、他言語の思考が日本語の思考とどのように異なるのか考えることができない。ある分野の専門家になっても、他分野のことを全く知らないと、目の前の大事な課題について他分野のひとと効果的な協力をすることができない。気づかないところでさまざまな制約を受けている思考や判断を解放させること、人間を種々の拘束や制約から解き放って自由にするための知識や技芸がリベラルアーツである。

大学院レベルでは高度な専門性が要求されるだけに、なおのことその専門性を相対化し、自由な人格として他分野の専門家や市民に接する必要性も増大する。したがって、卓越した専門性をそなえると同時に、多様な視点から自らの位置づけや役割を相対化することができ、謙虚でありながらも毅然として誇りに満ちた人間を育成することが、高度リベラルアーツ教育の役割である。より具体的には、自分の専門が今の社会でどのような位置づけにあり、どういう意味があり、ほかの分野とどう連携できるかを考えることなどである。自分とは異なる分野を専門とし、異なる価値観をもつ他者と出会うことによって、自らを相対化する力を養う。そのためには、古典を読む、別分野の最先端の研究に触れる、詩にふれる、比較をしてみる、などさまざまな形がありえるだろう。日本は他国と比べて研究チームにおける専門分野の多様性が低い（つまり他分野との協働が少ない）傾向がデータとして示されている事実を鑑みて、このような相対化の能力は、これまでの専門教育の欠陥を補うものとしての必要性が認められる。

このようなリベラルアーツは、ただ多くの知識を所有しているという静的なものではない。また専門分野の枠をただ越えるだけではなく、枠を「往復」する必要がある。さまざまな境界（専門分野の境界、言語の境界、国籍の境界、所属の境界）を横断して複数の領域や文化を行き来する、よりダイナミックな思考が必要となる。ここで往復には二種類の意味がある。一つは、異なるコミュニティの往復という意味である。たとえば他研究科等・専攻や他学部の授業への参加は、出講研究科等・専攻のバックグラウンドをもつ学生のかなかに、異なるバックグラウンドをもつ少数の学生、つまりアウェイの学生が入ることである。アウェイの学生にとっては、ホームの研究科等や専攻とアウェイの研究科等・専攻や

学部を往復することにより、自らの専門性を相対化する機会が与えられることになる。二つ目の意味は、学問の世界と現実の課題との間の往復、あるいは専門的知性と市民的知性との間の往復の意味である。後者は文系理系を問わず、学問に従事する者の社会的リテラシー、すなわち自らの研究成果が社会のなかにどう埋め込まれ、展開されていくのか想像できる能力にあたる。これは研究倫理を支える基盤ともなる。

自分とは異なる専門や価値観をもつ他者と対話しながら、他分野や異文化に関心を持ち、他者に関心を持ち、自らのなかの多元性に気づいて自分の価値観を柔軟に組み換えていく。そのような開かれた人格を涵養するリベラルアーツ教育を大学院教育のなかで展開する。